

# 仙台司教区

# 教区事務所だより

— 司牧目標第二年 —

## 「小教区共同体にキリストの平和を」

信者同士、信者家庭相互の交流を進めよう！



(第 63 号)  
昭和58年1月1日

一九八三年が明けた。一步一步、新しい二十一世紀に近づいている感じがする。近代科学は電子コンピューターの時代からロボットへと、ますますめざましい進歩を見せ、二十年、三十年以前の世界とは全く変わってしまった。それにひきかえ、人間の精神的な面での向上というのはあまりはつきりしていない。相変らず戦争の不安におびやかされている有様は、旧約時代から一歩も出ないといわれそうだ。むしろ科学の進歩発達によって、人間は自分の力を過信し、神を忘れた思い上がりになっていくため、社会の混乱が増しているように思える。キリストの福音を社会におよぼしてゆく必要はますますつよく、私たちキリスト教徒の責任はますます大きくなったのだといえよう。

さて、新しい年の司教年頭書簡が発表になった。昨年の司教年頭書簡は、仙台教区向こ

う三年間の司牧目標「家庭から社会にキリストの平和を」を発表した。今年はその二年目、司教書簡はさらに第二年の努力目標として、「小教区共同体つまり教会内の信者同士、家庭相互のキリストの平和の実現」を示唆している。新年の司教年頭書簡に示されたとおりである。もちろん、昨年私たちが努力した「キリストの平和をめいめいが理解し、身につけること」をふまえたものである。

正しい小教区づくりが課題

端的にいえば、今年度の仙台教区司牧目標は、「小教区教会におけるキリストの平和の実現」ということになる。昨年めいめいが身につけたものを、信者同士、家庭相互にひろげてゆくこともいえる。これは必ずしも小教区に限る必要のないものだが、わざわざ小教区としたのにはそれなりの理由がある。そこで私たちはあらためて、小教区の意義を考

える必要がある。

教会は教区、小教区制度を長い伝統としてきた。小教区は、司教から権限を分与された主任司教が統理する、司牧単位である。しかし日本では宣教が大きな場を占め、都市化や交通の発達で、小教区の壁を厚くすることが適当ではなくなっている。といつても、宣教司牧の拠点として、小教区の役割も大きい。小教区間の交流、協力を十分配慮した上で、小教区が宣教司牧の責任を果すことが求められているのではないだろうか。

小教区内の信者同士、家族相互のキリストの平和実現とは、小教区共同体の力を強固にして、宣教司牧の立派な拠点になることを意味している。排他的な小教区づくりでは決してない。むしろ仙台教区六〇の小教区共同体が、それぞれすばらしいキリストの平和に果たされた共同体に成長するなら、当然、小教区間の交流や協力が促進されてゆくことになる。さらにそうして育てられた信者の一人ひとり、教区や小教区のワクをこえて、単なる個人プレーではなく、真の福音宣教の使徒職に働くものに成長するであろう。

### 司教日程 (12月10日現在)

*calendar*

- 1月9日 修道名のお祝い・新年会(元寺)
- 15日 ウルスラ会・金祝ミサ(仙台)
- 18/19日 神学校常任司教委(東京)
- 21日 スペルマン病院理事会(仙台)
- 22日 社会福祉法人理事会懇親会(仙台)
- 28日 男女修道会合同役員会(東京)



老人ホーム建設などを検討

第17回岩手地区  
信徒連絡会代表者会議

去る11月21日午前10時から、第17回岩手地区信徒連絡会代表者会議が岩手カトリック・センターで開かれた。議題は次のとおりである。

- 一、司教評議会報告 一、老人ホーム建設問題
- 一、司祭不在時の信徒の役割と養成
- 一、岩手地区信徒大会 一、難民救済受入れ
- 一、司教司牧教書に基づいた来年のテーマ
- 一、平和旬間 一、アフリカ難民募金 他

この中で特に老人ホーム建設問題では、法律上の問題、場所運営、資金など活発な意見交換があり、教会関係者および一般信徒の老後を考える時、聖堂のある、信者の共同体を深める場所の必要性を痛感、原点から老人問題をみつめ、実現化への第一歩として準備委員会が発足、6人の委員が選出された。

司祭不在時の信徒の役割と養成の問題では現実に県内に司祭不在の教会があり、信徒が交替で御言葉の祭儀を行なうなど司祭不在時の役務を果している。「どういいう仕事ができるか、どう養成するか」などの質問に対し、ツiegel神父から、「司祭が居る居ないにかかわらず、信徒の役務がある。58年度から数回研修会を開き養成していきたい」との回答があり、各小教区毎に主任司祭と話し合うなど、意識を高めていく方向づけがあった。

役員改選では志家教会の石川晃氏を会長に選出、58年度に向けての新体制が発足した。

島田 実神父様

\* 八十歳を祝い  
記念ミサと祝賀会 \*\*\*



仙台教区で最も高齢の島田実神父は、11月11日満八十歳の誕生日を迎えた。去る11月28日、同神父の長寿を祝い、ゆかりある人達が集まり記念ミサと祝賀会が行われた。ミサは元寺小路教会で昼12時から島田神父を中心にケベック宣教会のクルノワイエ神父、豊屋丁教会の斎藤石雄神父、そして元寺小路教会の土井文雄神父の共同ミサで行われた。島田神父の薫陶を受けた、今はそれぞれの場で指導的立場にあるかつての青年達とその家族など多数出席、グレゴリアンによる歌ミサで同神父を祝った。ミサの後、会場をシェイターホテルに移し祝賀会が行なわれ、主日のミサを終えた司祭方も多数かけつけ、島田神父を囲み昔話を花を咲かせるなど、旧交を温めた。

新しい世紀をめざす私学教育

△第12回東北地区  
私立小学校教員研修会▽

去る11月13日(出第12回東北地区私立小学校(連合会長笠原節子)教員研修会が仙台市民会館を会場に行なわれた。今年は、「新しい世紀をめざす私学教育の課題」をテーマに「ゆたかな心を育てる学級経営」というサブテーマのもとに研修会が持たれた。開会式の後、各分科会の研究があり、午後は児童文学者の

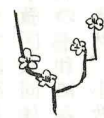
松谷みよ子氏の講演「私のアンネ・フランクをめぐって」があった。

なお前日12日(金)には宗教に携わる教師が、聖ウルスラ小学校を会場に、東京教区の深水正勝神父の指導で、子どもも宗教教育について研修し、各校の教材などを交換しあった。

東北には8校のカトリック系と1校のプロテスタント系の小学校があり、年に一度、百余人の教職員が一堂に集まり研修にはげんでいるが、非行、暴力などが低年齢化している昨今、私学教育が果たすべき使命の大きい事をこの研修会でも再確認させられた。

Ⅱ 司祭異動 Ⅱ

北上教会にマルコ神父  
二本松教会にユリアン神父



去る9月末から、岩手県北上教会の主任司祭として、マルコ・ゲンベルリ神父が任命された。マルコ神父はスイスに帰国したルカ神父の後任で、これまでは盛岡・四ツ家教会の助任として主にカトリック・センター及び青年達の指導に当たっていた。

福島県の二本松教会は、今まで松木町教会の巡回教会だったが、去る11月から、ドミニコ会のユリアン・ルージッキ神父が主任司祭として定住することになった。同神父はポーランド出身で五年前来日、東京の渋谷修道院で働いていたが、今度仙台教区で働くことになった。仙台教区のポーランド出身司祭は、ヤノシンスキー神父に次いで二人目である。

教会学校の使命を考える

一教会学校リーダー研修会  
△仙台V

去る11月6・7の両日、元寺小路教会信徒館を会場に教会学校リーダー研修会が行われた。開会式では、司教総代理三浦平三神父からあいさつをいただき、続いて、「教会学校の使命」というテーマで一本杉教会のラヴォア神父の講話があった。夕食後は各教会ごとに出し合ったりクリエーションで楽しいひとときを過ごし、半数の参加者は第二集會室に宿泊、夜が更けるまで親睦を続けた。

二日目は教材研究の研修で各教会ごとに発表、教会学校の目的を自覚し合った。昼食後はグループに分かれ、日頃疑問に思うこと、考えることなどを自由に話し合い、閉会式は教会のミサに合流し、多くの教会の人達と共に過した有意義な二日間を神に感謝した。

今回の研修会は中学生から主婦までの三十余人の広い層の参加があったこと、食事は二教会が担当し手作りであったことなど、各教会の積極的な参加があったことを特記する。

八戸で

ロザリオ集會



八戸の塩町・鮫西教会では去る10月31日(日)、ロザリオの祈りをしながら墓参、という形の合同集會を行った。

まず塩町教会(聖ウルスラ修道院を聖堂と

して一時借用)でミサの後、ロザリオ三連を唱え、その後、車で館越にある墓地に行き、ロザリオ一連、さらに八戸市菅東靈園カトリック墓地に移動しロザリオ一連を祈った。昼には参加者の持ち寄った弁当を食べ、和気あいあいの内に二教会合同の集會を終えた。

聖書週間に講演会

岩手カトリック・センター

盛岡の岩手カトリック・センターでは、今年の聖書週間にあたり、「地には人々に平和」というテーマを掲げ、ミサと講演会を行った。

まず、11月10日(日)にはポーランドの平和を祈りミサが捧げられ、11月17日と24日には、ツィゲル神父による講話「地には人々に平和」が行われ、聖書を通してキリストの平和について考えた。毎回40人前後の参加者があり、聖書週間にふさわしい催しとなった。

家族みんなで話しあおう

一家族のつどい仙台で

去る12月5日(日)午前11時から、仙台・八木山教会(主任クルノワイエ神父)で「家族のつどい」の集會があった。目新しい名のこの集會はマリッジエンカウンター(結婚相談所)の運動の一つで、家族がより深い対話ができるために心の通い合いを求めて行われる世界的なものである。指導は桐生のフランシスコ会修道院のダンナ神父。最近の家庭の崩壊は世界的であり、

20年後の離婚は10人に一人というほど一般的になるであろうと指摘、家庭のきずなを強める事がどんなに大切かを説明した。

全員がグループに分かれ、自分と家族との関係で良い点、悪い点など、自分の家族には話せないこともざつとばらんに話し合い、その後それぞれの家族が集まって家庭内の話し合いに入る。母と子の輪、夫婦同士、親子祖父、母三世代、修道者同士、一人で来た人達の輪など、幼稚園のホール一杯に沢山の家族の輪ができ、百人以上の人達が静かな音楽を聞きながら、リラクセスした気分でした。

この集いは、かつてマリッジエンカウンターを体験し大きな恵みを受けた三組の夫婦が中心になって企画したもので、沢山の家族がよりよい心の通い合いと出会いがあるようにとの祈りを込めて準備されたものである。

よりよい教会報をつくるために

教会広報担当者のつどい△2月11日V  
各教会の教会報担当者のつどいが来る2月11日(建国記念日)午後2時から、仙台・元寺小路教会信徒館で開かれる。

これまで各県代表の広報担当者のつどいを行っていたが、今回は、それを拡大し教区内の全教会の担当者を対象に行う。当日は女子パウロ会の長谷川昌子修道女の講話、小教区報、教区報を充実させるための意見交換を中心とした懇談会を、予定している。

アフリカ難民キャンペーンに

各地で協力



カリタス・ジャパンでは、昨年からアフリカ難民救済キャンペーンを行なっているが、仙台教区の各地でも難民救済への協力活動が積極的に続けられている。

盛岡の四ツ家教会では毎日新聞社の協力で昨年の11月28日から12月6日まで、「アフリカ難民写真展」を開き、広く一般の関心を喚起した。また2月17日には岩手県民会館でチャリティショーを行ない映画「汚れなき悪戯」を上映、その収益をアフリカ難民募金にあてることを予定している。

仙台の元寺小路教会青年会は、各教会の青

召命、それは野球のキャッチボールにたとえることができる。一つのボールを媒介にして二人以上の人間が投げ、受けとめ、投げ返す連続動作がキャッチボールである。もし、投げられたボールが受けとめられることなく、投げ返されることなく、投げ返されるキャッチボールは決して成立しない。召命、それは神と人とのキャッチボールである。神の語りかけに人は耳を傾け、生き方をもつて応えていく。神は様々な事柄を通して語られる。ある

年に呼びかけ、56年11月から街頭募金、トレーナー販売、写真展と講演会を次々に実施、息の長い救援活動を展開している。またカトリック系の施設、学校等でも待降節を中心に校内で募金活動が活発に行なわれた。

キリスト教一致祈禱週間

1月18日(火)～25日(火)

キリスト教一致祈禱週間が今年も全国的に行われるが、仙台でも恒例の合同祈禱会が開かれる。祈禱週間が始まる1月18日(火)は午後7時から元寺小路教会で、奨励は平塚幹夫氏。最終日の25日は、仙台・ホサナ教会で、奨励はジョリコール神父。キリストを信じる兄弟が心を一つにしてキリスト教の一致を祈る。

ときは人を通して、あるときは出来事を通して語られる。みことば(聖書)は神の語りかけそのものである。

とすると、みことばに生きる人は神の語

りかけに応え、神とのキャッチボールをして

いることになる。

みことばに生きる生

き方は様々である。その形態は人の数だけあるといえるかもしれない。

「神のことばを聞いて守り行なう」との聖書のことばは、神とのキャッチボールの極意といえそうである。(首藤)

仙台に

「いのちの電話」開設

信者も参加・協力!



さる11月1日、仙台市に全国で15番目のいのちの電話が開設された。誰にもいえないことで悩んでいる人びとに、電話という、名前を伏せた会話で、悩みの相談を受けるシステムで、30年ほどまえ、自殺予告の電話を受けたロンドンの一牧師がはじめた。日本では10年前東京で始まり、いまでは北海道から沖縄まで15か所で行われている。その成り立ちからキリスト者が多く、日本でも各地のいのちの電話にカトリック信者が参加、協力している。いのちの電話はそのすべてがボランティア、すなわち善意の人びとの協力によって運営されている。協力の方法は①いのちの電話後援会員になって資金の援助をすること②一定の訓練期間をへて電話相談員となること、がある。全国どこからでも相談できる。

●電話相談は

○二二二-24-四三三三(午後3時～午後11時)

●協力ご希望の方は

○二二二-63-四五六二(仙台いのちの電話事務局)あるいは、

○二二二-22-七三七七(仙台教区事務所) 三浦神父まで。

【訂正】12月号3頁の盛岡白百合新校舎落成記事中敷地面積二万六千平方メートルは二十六万七千四百三十四㎡の誤りでした。訂正してお詫びします。

祈り

元寺小路教会 小川 晴美

聖書のことばは、語りかけてくる。沈黙の中で、一つの方向を指し示してくれる。神様はいつも呼びかけておられる。どんなに大声で神様が呼びかけて下さっても、聴く耳がないものには聞こえない。

11月22・23日、沢田神父様による黙想会が愛子の黙想の家で行われた。私にとつて黙想会は初めてで、沈黙という意味もよくわからなかったが、食事のあと、神父様が説明して下さい、講話が始まった。

一つ一つのことばを大切に下さり、淡々とお話しなさる神父様に、イエス様はこんなふうに関心することを話したのかしら、と思いつつ、心の中にしみわたるような神の声を聞いていた。

忙しい毎日の生活の中で、きつと神様の声を聞き逃しているのだろうと思うことも多い。でも、それを感じさせて下さるのも神様だと思つと、感謝の気持ちに変つてしまう。そのときそのときと与えて下さる賜物を受けとめる力を下さいと願いたいと思う。

祈りは力である。

「家族のワークショップ」に参加して

八木山教会 岡田 謙一

「お父さん、早く帰ってきて、ボクと遊んでください」

「いや、お父さんは仕事で忙しいんだ、今日

も何時になるかわからないよ」

.....\*.....\*.....\*.....

NHK特集番組「一人で食事する子供たち」より。日本では、子供たちが家族と一緒に夕食を共にすることが、アメリカや韓国などの外国と比べてずっと少ない。そういう家庭の子供たちは、食事の満ぶく感もあつても、満足感も味わっていない。そして、そういう子供たち程心身ともに弱い。

.....\*.....\*.....\*.....

### 読者のへし



前の場面は我が家の現状であり、後者は日本の現実であることを考えると、このままではとり返しつけないことにならざるを得ないという危機感が湧いてきます。日頃うすうす気がついていながら、対話（心のふれあい）の少ない生活のペースを改めるところまで、なかなか踏み切れないでいた自分に、ひとつのインパクトを与えてくれたのが12月5日のワークショップでした。確かに仕事は大切だが、まずは自分の家族の本当の意味の幸せを作り上げる努力をしなければ、人生の大きな目的を果たしてはいけません。ダンナ神父様のワークショップでのお話は、翌日のNHK特集で提起された根本的な解決策と合致するものであると強く感じています。ワークショップは半日でしたが（半日であったために私も参加できなかったが）、ダンナ神父様の上手な指導と何組かの献身的な夫婦奉仕により、参加者に大きな影響を与えたようです。主の働き手となった方々に感謝！

### 春秋



最近、ときどき突然のようにつけられることがある。そんな時、死がふと頭のかたすみよぎる。

今までのようなことは思いもよらなかつただけに、自分の中にある変化を知らされる。新しい年を迎え一年齢をとつたせいだろうか？

ひとは多くの場合、その時どきの忙がしさにまぎれて年月を重ねてしまうもの。歴史を振り返ってみてもしかり。同じ過ちを繰り返して続けている。もう二度と、と思いつつ、もう戦争への傾斜を少しづつ歩み始めている。

ひと一人の人生もそうである。同じ過ちを繰り返して生きていく。何故だろうか？ 仕方がない、とあきらめるべきことなのだろうか？

どうも違う。方向が、行くべき目標が見えていないのではなからうか。

死という避けることの出来ない終局を見定めてみたらどうだろう。いまの時がかげがえのない時、いまの出会い一人ひとりが、かけがえのないひとになるに違いない。

新しい年にあたり、目標を見つめることによつて、今の時を大局的に生きたいものである。

(狼河原)

# わが教会

(27)

岩手・宮古教会



陸中海岸国立公園は、本州の最東端に位置する人口六万三千人の宮古市を中心に、南北それぞれ特色ある景観を示しております。北部は海のアールプスと呼ばれ、五十メートルから二百メートルの豪壮な断崖群と岩礁風景、南部は、リアス式海岸の変化に富んだ原始景観で、東北新幹線開通に伴い、更に多くの観光客が訪れるものと期待しています。

私達の教会は山田線宮古駅から徒歩約三分の所にあり、信者数百三十人、主任司祭はベトレム外国宣教会のチャールズ・レンネル神父で小百合幼稚園長兼務、先頃母国スイスへの里帰りを終え、心身共に充電して帰還、今年で在官13年目を迎えることになりました。

宮古は今を去る約千三百年前、教会周辺が「横山の里」といわれたのが始まりと伝えられています。教会の歴史は大正に入ってからで、下閉伊郡田老村長をつとめた浦田正夫、カチゴ夫妻の二人の信者から出発しました。浦田氏は明治末期盛岡四ツ家教会において、宮沢賢治の作品にも影響を与えたといわれる

ブジエ神父のもとで伝道士としても活躍された敬けんな信者であったと伝えられています。こうして当地方に蒔かれた小さな種は昭和の初めには10人となり、この人々がキリストのみ教えの証人として信仰の灯を守り育てたのです。当時の交通不便な時代（鉄道はまだ宮古まで開通していません）、前記のブジエ神父を始めとし多くの神父方が年に数回巡回しミサを捧げ信者を力づけたといわれます。

日本初の枢機卿、若き日の土井辰雄師も、その一人でした。昭和26年、盛岡教会から独立し、翌27年、念願の聖ペトロ宮古教会の新聖堂が建てられました。祭壇の十字架像は現在日本を代表する彫刻家で、長崎二十六殉教者像などで知られる新制作派協会の舟越保武氏の作です。聖堂前にそびえる鐘楼堂の鐘は昭和35年三代目主任司祭シュミドリ神父の出身地スイスのワレーンの村から贈られた「アンゼラスの鐘」と呼ばれるもので、毎日市内に安らぎの音を響かせております。

昭和48年に懸案の納骨堂が信者の募金により完成し、私達の先人がここに眠っています。現在教会活動としては、教会委員会が信徒会の運営にあたり、壮年男子による父の会が毎月第二日曜日、婦人会が毎月第四日曜日にそれぞれ集會を持ち、信仰で結ばれた共同体としての時の話題や聖書についてなど話し合い、親睦を深めています。子ども達のためには未信者を含めた土曜学校があり、第四日曜日には、この子ども達のためのミサが行

われています。若い信者も最近増えつつあり、土曜学校の手伝い、教会行事への協力と新しい芽が育ちつつあることは主任司祭への大きな励みとなりつつあります。しかし、まだまだ主任司祭への依存度が強く、教会に対して受け身の協力が実態で、信者一同「猛省」して、自立した共同体を確立しなければならぬと思います。

冒頭で紹介したように、宮古は自然に恵まれた所ですので、先輩諸氏におかれましては当地を訪れ、「よい刺激」を与えて下さるよう紙面を借りてお願い致します。幸い、教会には少人数であれば宿泊施設もあり、ご利用いただければ幸いです。

最後になりましたが、仙台教区の総ての神父さま方、教会の仕事に携わる方々、信者を含めたすべての方々に新しき年も神の恵みが豊かに注がれますよう、心からお祈り申し上げます。（文責・ヨハネ・佐々木国雄）

## 【おしらせ】

### ◎教区事務所の冬休み

昭和57年12月24日～昭和58年1月6日  
但し休業中緊急の要務をお持ちの方は、ご遠慮なく、次の者にご連絡下さい。  
司教館（0222-19713030）

三浦神父、又は平賀神父へ。

仙台司教区事務所だより第63号

昭和58年1月1日発行

発行所 仙台司教区事務所

〒980 仙台市本町一丁目2番12号

TEL 0222 22 7371